▸論 文◂

「地域社会参加活動」の成果とその意味するもの

～４年間をふりかえって～

The Results and The Meaning of "Participation in Community Activities"

講師 室 林 孝 嗣　　講師 本 江 理 子
MUROBAYASHI Takatsugu　　HONGO Riko

Ⅰ．はじめに

2009 年（平成 21 年）4 月、富山国際大学子ども育成学部がスタートしてから、４年が経過しようとしている。本学部の教育目標は、「現代社会を主体的に生きるための幅広い知識と教養、子ども育成の専門家としての確かな資質能力と学びの精神をもって、地域社会の発展に貢献できる人材を育成する」ことであるが、その目標を実現する第一歩として位置づけられた授業に「地域社会参加活動」がある。この授業は、１年次の必修科目（2 単位）であり、「講義・演習」と「地域での活動」とで構成されている。

試行錯誤を繰り返しながら、学生とともに作り上げてきた「地域社会参加活動」の４年間をふりかえるとともに、その成果と意味について考察する。

Ⅱ．授業の概要

１．授業の目的

本学部は、「子どもの最善の利益」尊重の理念、専門的な知識・技術、豊かな人間性を併せ持ち、子ども育成の優れた実践能力を備えた人材の養成をめざしているが、具体的には以下の３つの人材像をイメージしている。

（１）子どもの生活・発達・学びの連続性をふまえて、一貫した教育指導ができる人材
（２）子どものよりよい育ちのために、家庭・地域と連携・協力し、信頼される人材
（３）地域に愛着と誇りを持ち、地域に根づいた教育・福祉・保育の実践ができる人材

また、教育課程の特色として、以下の３つを掲げている。（「　」内は授業名）

（１）子ども育成とその環境を一体的に捉える。
　「子ども育成入門」「子ども育成論」「子ども育成専門演習」
（２）効果的な実践的専門教育を推進する。

「幼児理解」「教職実践演習」「相談援助演習」

（３）「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」ことを重視する。

「地域社会参加活動」「富山の教育・福祉・保育特別講義」「富山に学ぶインターンシップ」

「地域社会参加活動」は、教育課程の３つ目の特色としての「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」を実際に行うための授業であり、その目的を「富山の特色ある教育・福祉・保育の現場でボランティア活動に参加することで、地域社会とつながりをもつ社会の構成員としての自覚を持ちながら、子ども育成の現状と課題について学ぶ」としている。また、「地域社会参加活動」の活動自体を「地域社会参加活動の意義と課題」（富山国際大学子ども育成学部紀要第１巻 2010）[1]で、以下のように説明している。

―この活動はボランティア活動をすることが本来の目的なのではなくて、「まず地域に出てみる、そして地域で何らかの活動（＝地域活動）をすることにより、そのことから何かを学ぶ。それは地域の中で営まれる活動であって地域の中だからこそ学べる『実践の学びの世界』に身を置くこと」なのである―

２．授業の方法

講義概要では、「地域社会参加活動について、講義及び演習を通して学習し、空き時間や放課後、休業日におけるボランティア活動を行い、活動レポートを取りまとめ、体験のふりかえりを共有する」としている。 講義等の内容は以下の通りである。【表１】

【表１】＜講義・演習の内容（平成 24 年度）＞

No	月日	講義・演習	活動等
1	4/10	オリエンテーション	
2	4/17	活動紹介（１）	
3	4/24	活動紹介（２）	
4	5/1	活動紹介（３）	
5	5/8	障害者スポーツ大会の準備	障害者スポーツ大会（5/13）
6	5/15	障害者スポーツ大会を振り返って（グループ討議）	・課題レポート 「あなたにとってボランティアの意義は何ですか？」 「○○にとって地域とは何ですか？」 ＜地域活動＞ ・活動レポート ・最終活動報告書(～12/21)
7	5/22	地域活動に向けて（１）（活動方法等）	
8	5/29	地域活動に向けて（２）（一部活動報告）課題	
9	7/3	地域活動に向けて（３）（課題レポート提出）	
１０	7/10	地域活動に向けて（４）（グループ討議）	
１１	10/2	活動報告会（１）	
１２	11/6	活動報告会（２）	
１３	12/11	活動報告会（３）	
１４	1/8	まとめ（演習：活動を振り返って）	
１５	1/15	最終活動報告書返却、アンケート調査	

＜地域社会参加活動の時間数＞

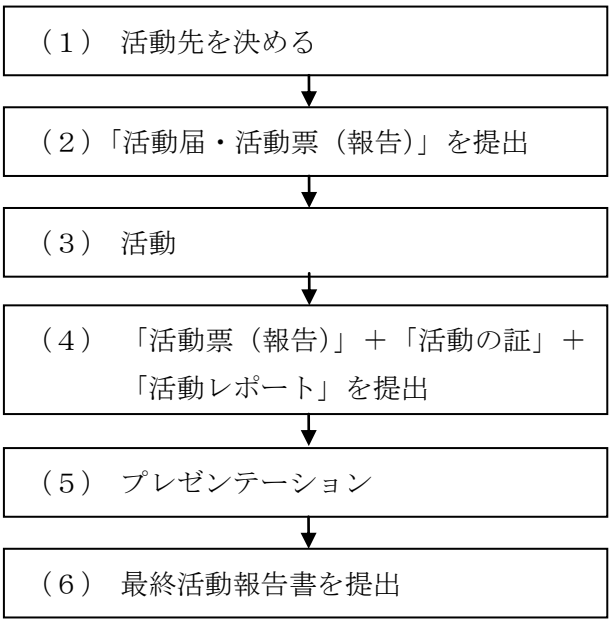
（１）講義・演習 ＝20 時間（＝10 コマ）

（２）地域活動　　＝20 時間（＝10 コマ）
　　合計　　40 時間（＝20 コマ）
　※１コマ＝2 時間

３．地域活動の手順

活動の手順は、以下のとおりである。【図１】

【図１】＜地域活動の手順＞



（１） 活動先を決める

活動先は、自分で探し、決める。授業でどのような地域活動があるか、また活動先を探す方法等を提示する。活動先は掲示板等で紹介するが、基本的には自分で活動先を探す。自分がしたいと思う活動先を見つけ、自分で活動先にアプローチし、申し込む。

（２） 「活動届・活動票（報告)」を提出

活動日時・活動先・活動内容等が確定したとき、「活動届・活動票（報告)」の用紙に、①活動名（主催者名)、②活動日時、③活動先、④活動内容を記入し、担当教員に提出する。教員は、「活動届」の内容を確認し、地域社会参加活動にふさわしいか否かを判断する。「活動届」は教員が保管し、同時に「活動状況確認表」（教員が学生の活動状況を把握するための一覧表）に①～④を転記する。「活動票（報告)」は切り離して学生に返却する。学生は「活動票（報告)」を持参し、活動に参加する。この手続きを経ない活動は、地域社会参加活動の活動として認められない。

なお、「活動届・活動票（報告)」の用紙は、活動ごとに提出する。

（３） 活動

活動は、活動先との申し合わせで確認した内容（日時・場所等）に従って各自で行動する。活動後、「活動票（報告)」を活動先に提示し、印もしくはサインをもらう。

（4） 「活動票（報告)」＋「活動の証」＋「活動レポート」を提出

活動終了後、１か月以内に「活動レポート」を作成し提出する。「活動レポート」は、「活動届・活動票（報告)」の用紙に記入した①活動名（主催者名)、②活動日時、③活動先、④活動内容をもとに、⑤「活動状況」と⑥「活動を振り返って」を記載する。「活動レポート」を担当教員に提出する際には、「活動票（報告)」(印 or サインのあるもの）と「活動の証」(活動内容を表すもの、パンプレット等）を添える。提出された「活動票（報告)」「活動の証」「活動レポート」は先に記載した「活動状況確認表」をもとに確認する。「活動レポート」の活動内容・時間等が「活動届」と異なっている場合は、学生に確認し活動時間数等を確定・認定する。活動時間は「活動状況確認表」で、学生ごとにチェックする。その後、「活動票（報告)」「活動の証」「活動レポート」を学生に返却する。学生は、それらを各自でファイリングし保管する。

（5） プレゼンテーション（活動報告会）

活動レポートで、活動をふりかえるだけではなく、パワーポイントで活動内容を発表する機会（活動報告会）をもつ。学生は事前に発表する旨を教員に伝え、パワーポイントを作成する。個人・グループで発表する（10～15 分程度)。

（6） 最終活動報告書の提出

年間を通して行った活動を「最終活動報告書」で全体としてふりかえる。「最終活動報告書」提出の際は、ファイリングした「活動票（報告)」「活動の証」「活動レポート」も同時に添える。

４．活動状況確認システム

60～80 名の学生個々人の活動を把握するのは、至難の業である。「活動届・活動票（報告)」の用紙と学生の活動を確認する「活動状況確認表」で各学生の活動内容と活動時間数を把握した。「活動状況確認表」には、①活動名（主催者名)、②活動日時、③活動先、④活動内容を記載するシートと、仮の認定時間及び認定時間数の一覧を示すシートを用意した。大学内の LAN システム上に共有フォルダを置き、担当教員２名で確認作業をその都度行った。届出・提出等に不備があった場合、学生に連絡し確認・修正を行った。根気のいる作業であるが、そのことで学生の顔と名前が一致していくことになる。

なお、活動時間数の基準を以下のように定めた。【表２】

【表２】＜地域活動の時間数＞

活動パターン	時間数	備考
一日の活動（基本パターン）	6 時間	
一日 6 時間未満の場合	実時間	
＜宿泊を伴う活動の場合＞		
一泊２日（基本パターン）（午後～翌日午前）	14 時間	6 時間×日数＋（日数×1）時間
一泊２日（基本パターン）を越える場合	16 時間	6 時間×日数＋（日数×2）時間
二泊３日	24 時間	
三泊４日	32 時間	
四泊５日	40 時間	

・活動時間の合計が、20 時間以上になること。
・移動時間は含まない。
・１時間単位で認める。

５．評価システム

評価については、「講義・演習」の出席状況と「地域活動（20 時間以上)」の達成の状況、「最終活動報告書」の内容を基準とし、その他「課題レポート」及び「プレゼンテーション」を加点の対象とし、全体としての本人の努力度を加味する。努力度は、活動の独自性、レポートの記載内容等から判断した。【表３】

（１）講義・演習（20 時間）　　…30%
（２）地域活動（20 時間以上）
　　＊「活動レポート」の提出　…30%
（３）「最終活動報告書」の提出（20 前後%）
（４）その他
　　・課題レポート
　　・プレゼンテーション

【表３】＜評価票＞

氏名	講義・演習	活動レポート	課題レポート	プレゼン	最終活動報告	努力度等	総合点
A 学生							
B 学生							
C 学生							

上記の評価票に基づき、担当教員２名で協議し評価した。

Ⅲ　地域社会参加活動の実際

毎年、授業終了時にアンケートを実施している。その中から、年度ごとの活動内容について見てみると、各年度ごとに活動内容に特徴が認められる。(【表４】参照)

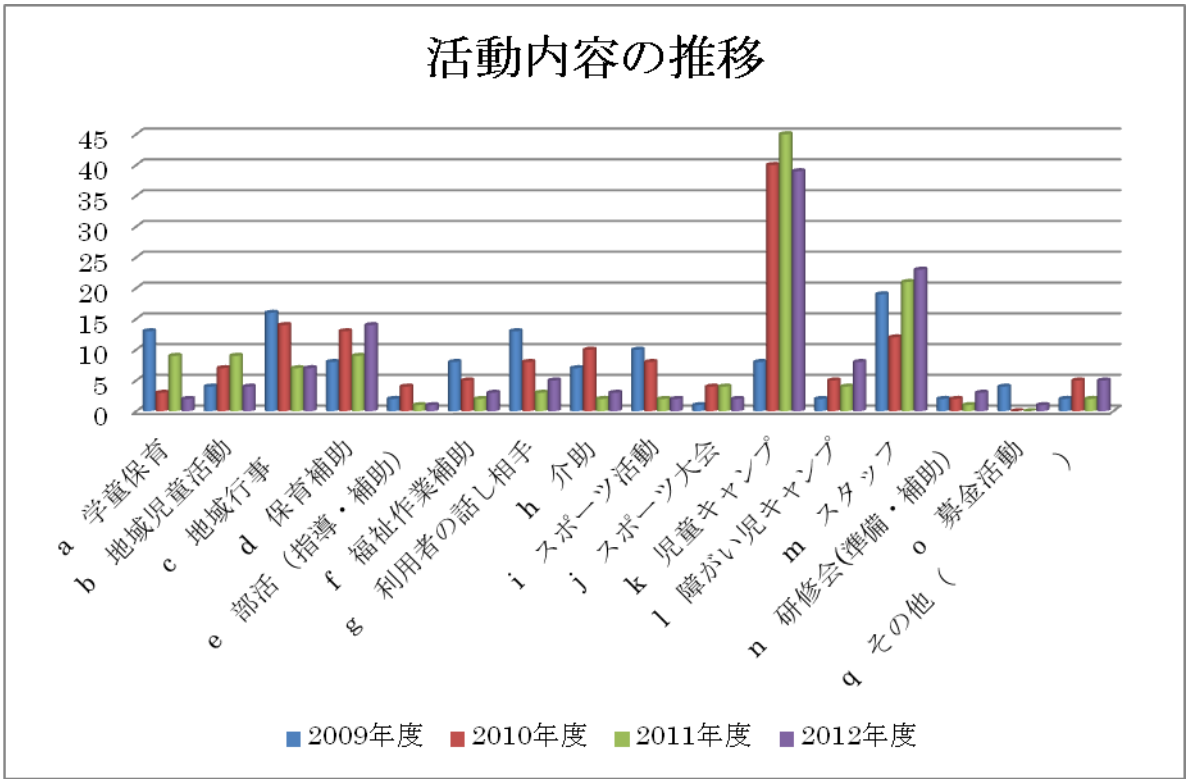
2009 年度は、初年度ということもあり、活動はバラエティに富んでいた。しかし、2010 年度になると、にわかに児童キャンプが多くなる。二泊三日の児童キャンプに一回参加することで活動時間 20 時間を達成できることもあり、多くの学生が参加した。参加しやすく子どもたちとふれあうことができる点では、学生にとって一石二鳥にも三鳥にもなった活動である。全体として活動に特徴がなくなった面は否めないが、そうした中でも、児童キャンプに参加した学生の中から、その後も授業とは関係なく活動する学生が増えていった。それは、大学内の行事（オリエンテーション合宿等）でリーダーシップを発揮する学生としてその成果が現れた。またリピーターが増えたことから、公共の児童キャンプを主催する施設から、毎年参加協力の依頼が届いている。

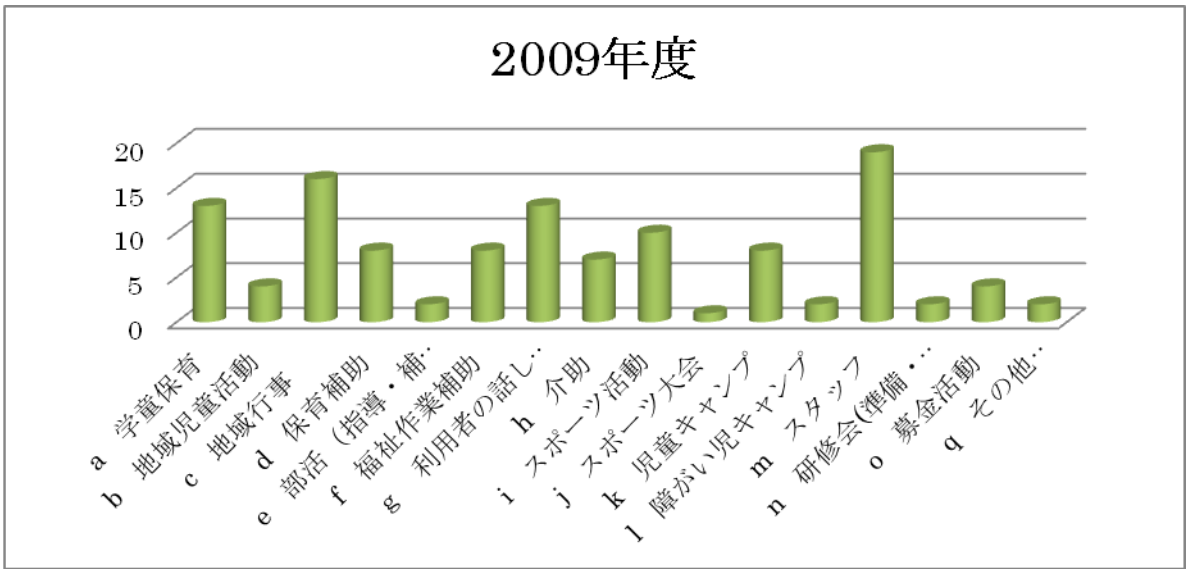
2011 年度は、2010 年度の流れをそのまま受け、児童キャンプの参加者が多かった。

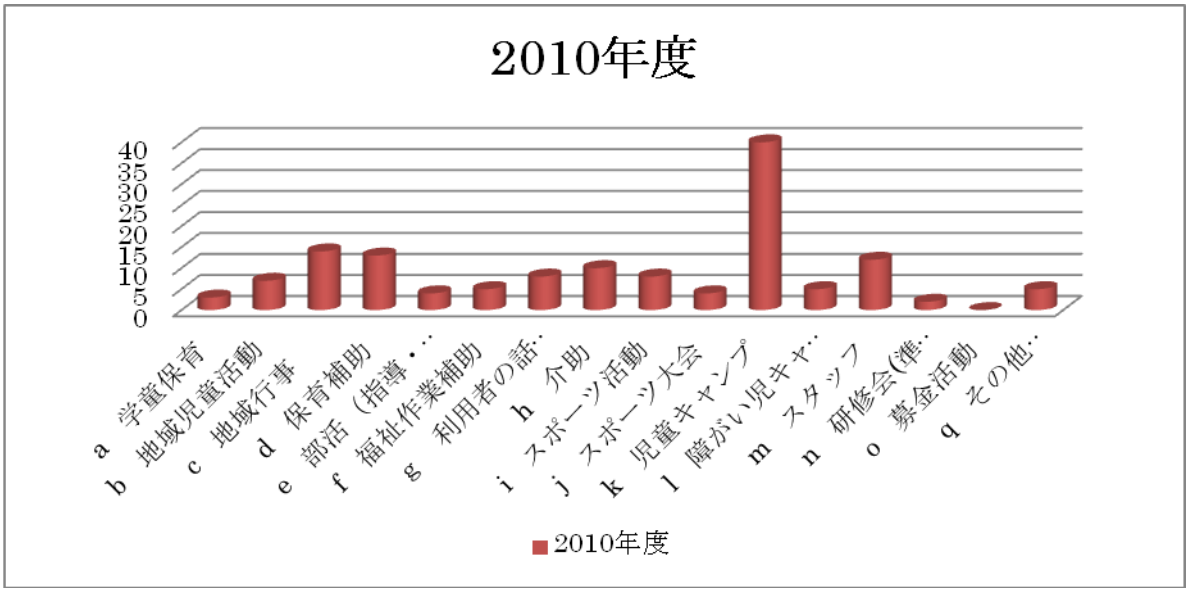
2012 年度は、活動自体が落ち着き、皆がキャンプに行くから一緒に行くのではなく、自分のしたいことを中心に活動を選んだ学生が多かった。特徴的な活動では、東日本大震災の被災地に向

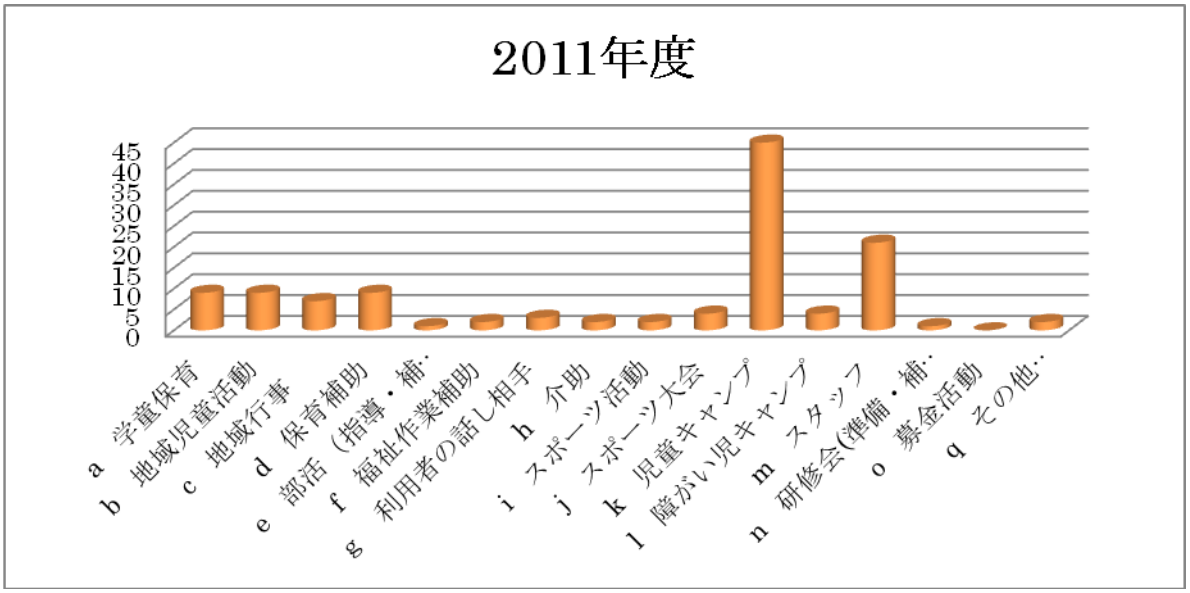
【表４】＜活動内容＞（「地域社会参加活動についてのアンケート」より）

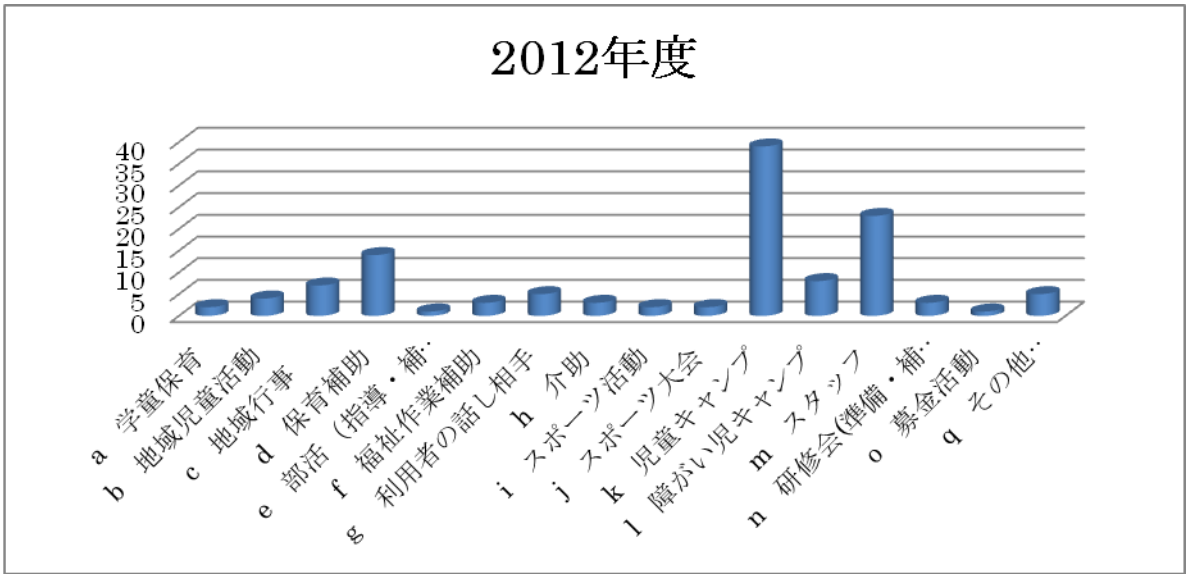
	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
a　学童保育	13	3	9	2
b　地域児童活動	4	7	9	4
c　地域行事	16	14	7	7
d　保育補助	8	13	9	14
e　部活（指導・補助）	2	4	1	1
f　福祉作業補助	8	5	2	3
g　利用者の話し相手	13	8	3	5
h　介助	7	10	2	3
i　スポーツ活動	10	8	2	2
j　スポーツ大会	1	4	4	2
k　児童キャンプ	8	40	45	39
l　障がい児キャンプ	2	5	4	8
m　スタッフ	19	12	21	23
n　研修会(準備・補助)	2	2	1	3
o　募金活動	4	0	0	1
q　その他（　　）	2	5	2	5




2009年度
20
15
10
5
0
a 学童保育
b 地域児童活動
c 地域行事
d 保育補助
e 部活（指導・補…
f 福祉作業補助
g 利用者の話し…
h 介助
i スポーツ活動
j スポーツ大会
k 児童キャンプ
l 障がい児キャンプ
m スタッフ
n 研修会(準備・…
o 募金活動
q その他…


2010年度
40
35
30
25
20
15
10
5
0
a 学童保育
b 地域児童活動
c 地域行事
d 保育補助
e 部活（指導・…
f 福祉作業補助
g 利用者の話…
h 介助
i スポーツ活動
j スポーツ大会
k 児童キャンプ
l 障がい児キャ…
m スタッフ
n 研修会(準…
o 募金活動
q その他…
2010年度


2011年度
45
40
35
30
25
20
15
10
5
0
a 学童保育
b 地域児童活動
c 地域行事
d 保育補助
e 部活（指導・補…
f 福祉作業補助
g 利用者の話し相手
h 介助
i スポーツ活動
j スポーツ大会
k 児童キャンプ
l 障がい児キャンプ
m スタッフ
n 研修会(準備・補…
o 募金活動
q その他…



かった学生がいたことであろう。2011 年度も被災地に行った学生はいたが、地域社会参加活動として行った学生は今年度が初めてであった。また、児童キャンプの参加の割合は若干減り、地域行事（スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド、介護の日のイベント、保育所の運動会等）に参加する学生も現れた。

Ⅳ　地域社会参加活動の成果

１．地域活動の手順

（１）　活動先を決める（活動先と連絡・調整）。

活動先は、自分で探し、決める。 中学・高校で経験したボランティア活動の多くは、学校側があらかじめ設定したものが多かったようである。そうした意味では、初めて自分で活動先を探す学生が大半であった。活動時期・時間・場所・内容を自分で決めるとき、まず、「活動」の情報（いつ、どこで、何を）を得なければならない。できるだけ自分に合った活動を探し・選ぶ。この活動を選ぶときに他者から強制されることはない。活動先を自分で選択し、自分で決定できる。このことから活動に対して主体的に取り組むスタートラインに立つことになる。それが、活動先にアポイントを取ることである。自分が何者であるかを告げ、自分が活動する意思を示す。それが電話であれ申込書であれ、そのことにより活動することを相手側に「宣言」する。（自己選択・自己決定）

（２）「活動届・活動票（報告）の提出」

活動先が決まると、次に「活動届・活動票（報告）」を提出する。この手続きをしないと地域社会参加活動の活動として認められない。この時点でその学生が地域社会参加活動の一連の手続きを理解しているかどうか確認できる。ここで行き詰る学生は、後に行われる様々な実習の際の手続きにおいても同様に困難を示すことが認められる。学生にとっては、活動届を提出することで、改めて活動に対する意識を確認し、活動先と教員の二者に宣言したことになる。このことで、モチベーションを高め、活動に対して責任感が芽生え始める。（理解度・計画性・責任感）

（３）活動

活動は、活動先との申し合わせで確認した内容（日時・場所等）に従って各自で行動する。しかし、（２）で申請しなかった活動は、地域社会参加活動の活動として認められないことに気づく学生もいる。活動後、「活動票（報告)」を活動先に提示し、印もしくはサインをもらうわけであるが、そのことを躊躇する学生がいる。しかし、「報酬ではなく、サインをもらってくる」ことで単位認定される活動をしたことの意識を高めるとともに、活動自体が引き締まる効果もある。４年目に入り新規以外の活動先では、活動後のサインは、ほぼ定着した感がある。

（４）「活動票（報告)」＋「活動の証」＋「活動レポート」を提出

ただ活動をするだけでは、課せられた時間をこなすことのみにとらわれてしまう。そこで、活動後のレポートを課すことで、何をレポートしようかという観点で活動をするようになる。活動の状況を説明するとともに、全体を通しての自分の感想を記載する。レポート作成時に自分の行動をふりかえることで、活動中のいろんな場面が思い出される。つまり、実際の活動を追体験することにより、自分がどのような場面でどのような行動をとったのか再確認する。その行動の意味を自分なりに捉えなおすことができる。意味のある行動ができたときは達成感が生まれる。また、どうして自分はそのようにしなかったのだろうという後悔や反省も生まれるであろう。いずれにしてもこの活動は、他人から強制させられたものではなく、自分で選んで決めた活動である。達成感を経験した学生は同時に、自らこのような活動に取り組んだことに自己肯定感に似たものを感じる。（達成感・自己肯定感）

（５）プレゼンテーション

活動をパワーポイントにまとめ、皆の前で発表する。勇気を要するが自分の活動をふりかえるとともに、他の学生と体験のふりかえりを共有する。他の学生がどのような体験をしたのか興味深く聴き入っている。（達成感・体験の共有）

（６）最終活動報告書を提出

年間を通して、地域活動を複数回行った学生たちは、それらを通して「活動前の自分」と、「活動後の自分」をふりかえる。まず、その自分の変化に驚く。そして、「自分にとっての地域社会参加活動の『意味』について」考えたとき、果たして自分が行った活動はどのような意味を持っているのだろうかと自らに問う。自分にしかわからない活動を他者に理解してもらおうとするとき、自らの活動をまたその時の自分を客観的に見ようとする。自分を客観的に見ること、つまり自分はどういう人間なのかを知る機会（自己覚知）を得る。さらに自分に起きた変化に気づく機会でもある。そして、自分の特性を知り、今後の自分の将来についても考えることになる。（自己覚知）

学生が一番苦労するのは、（１）の活動を探しアポイントを取るところである。「いつか誰かがしてくれるであろう」という認識は、「時間の経過」と「集団の力（動き)」で崩れていく。自ら動くことなく放置していると、次第に活動のチャンス（機会）が少なくなり、周囲の学生が活動に取り組んでいるのを見ることで学生自身が動き始める。つまり、教員が行うのは、活動を強要することではなく、「課題（条件）を設定する」ことである。それが、「地域活動の手順」を示すことである。

地域活動の手順のそれぞれの段階には、学生に期待されるキーワードがある。（１）では「自己選択」「自己決定」、（２）では、「理解度」「計画性」「責任感」、（３）（４）では、「達成感」「自己

肯定感」、（５）では、「達成感」「体験の共有」、（６）では、「自己覚知」である。これらは、ただ単に活動をするのではなく、「活動をふりかえる」ことで、そのことがより効果的に現れより明確になっていく。そしてそれは、「時間の経過」と「集団の力（動き）」がそれを動かしていくのである。

２．活動のふりかえり

学生たちは、授業最終日の「地域社会参加活動についてのアンケート」で以下のような感想を述べている。

「最初はあまり乗り気でなくて、しかも５泊６日という長い間ボランティアをするという不安もあり、いろんな感情が混ざり合っていました。しかし、活動し始めると、思った以上に楽しくて、あっと言う間に６日間が過ぎました。今では活動に参加できて良かったと思います。ボランティア活動によって、たくさんの人とつながることができたし、その活動先の人とも仲良くなれ、活動に参加していた子どもと文通もしています。とてもいい経験ができました。新入生にもいい経験をして欲しいです」（2010 年度生）

「私は、ボランティアとか嫌いだけど、やってみて充実感とか味わえるし、無駄ではない。嫌々やったボランティアでも、何か一つでも自分のためになると思うし、やって損はない。でも自分がどういう人になりたいのか、そういうのを考えた上で、ボランティアをしたほうがいい。そちらのほうが、より自分のためになると思う」（2010 年度生）

また、「最終活動報告書」では、以下のように自分の活動をふりかえっている。

「実際に私も震災から１年半経った石巻に足を運び、１週間という短い時間ではあったけれど、“被災地のために”と想って一生懸命活動してきた。被災地という場所での活動であったからこそ、より強く感じることのできた人と人の繋がりや人と関わることの楽しさや温かさ、助け合い・支え合うことの大切さ。今の自分の周りの環境を思い直したときに、周りに助けられてここまでやってこられたことや友達や家族と支え合って生活してきたこと、けっして一人ではなかったことを考えさせられた。当たり前のように感じていた環境が、実は人と人の繋がりから生まれていることに気づき、とても温かい気持ちになった。私たちは人と人の繋がりの中で生活していることや、困ったことがあったら助け合い・支え合っていくことを忘れてはいけないと思う。このように考えるようになったのも、被災地ボランティアを通して、年齢も考え方も異なる方々と出会ったり、その地域の方々とコミュニケーションをとったりすることで、多くの刺激を受けたからだと思う」（2012 年度生）

「地域の方と密接に関わり、コミュニケーションを取ってみて初めて気付くことが多々ある。様々な人と関わり合いながらたくさんのことを経験することで、今まで以上に視野が広がり、人として豊かになれるのではないだろうか。また、人のために何かをすることで、両者ともに温かい気持ちになれるのではないだろうか。些細なことかもしれないけれど、このような気持ちになれるということはとても素敵なことであり、このような経験が、将来、教育者・保育者という立場で子どもたちに携わっていくときにきっとどこかで生かされていくと信じたい」（2012 年度生）

以上のように、実践を通しての気づきや深い洞察があり、自分と他者（地域）との関係性にま

で考えが及んでいる。

当初、多くの学生は、地域社会参加活動は、「授業でボランティア活動を強要するもの」という認識をもっていたようである。しかし、この活動はボランティア活動をすることが本来の目的なのではなく、「まず地域に出てみる」、そして「地域で何らかの活動（＝地域活動）をする」ことにより、そのことから「何かを学ぶ」。それは「地域の中で営まれる活動であって地域の中だからこそ学べる『実践の学びの世界』に身を置くこと」であるとし、ボランティア活動を推奨したわけではない。

活動の紹介はしたが、活動をするかどうかは学生の判断に委ねた。ただし、活動をするときの「手順」を示した。「活動の手順を踏むことで、活動が認められる」というシステムにより、学生は手順を踏むことになった。同時に地域社会参加活動にふさわしい活動であるかのチェックを「届け」で行った。授業であることから「活動により金銭等の収入がないこと」が最大の条件であった。あとは、地域で行われている活動であれば、「概ねよし」とした。そして活動時間（20 時間）を設定した。

活動に優劣があるわけではなく、その人にとって取り組みが平易な活動であれば、活動レポートの記載内容が少なくレポートの分量を確保するのに苦慮する。一方、活動に至るまで、また活動自体に苦労した人ほど、活動レポートに書くことが多く、内容も深くなる。同様に、活動を一つしかしなかった人は、活動レポートと同じ内容となり、最終活動報告書で苦慮する。複数の活動をした人は、最終活動報告書では書く内容が多くある。そこにその人が苦悩した努力の度合いが現れる。文章力・表現力の差は致し方ないが、実際場面を見ることのできない教員は、レポートの内容で判断する。そしてその内容から本人の努力度を読み取る。

努力度は、活動をふりかえることで明確になる。その活動が自分にとってどのような意味をもつのか、また他者にとってどのような意味をもつのかを考えたとき、その活動の意味がより明確になる。そしてそのことを行った自分に意味を見出せるのである。（自己肯定感）

３．実習に向けての準備段階

本学部は、１年次に幼稚園教育実習Ⅰ、２年次に保育所実習Ⅰ、施設実習Ⅰ、介護等体験、３年次に幼稚園教育実習Ⅱ、小学校教育実習、相談援助実習Ⅰ・Ⅱ、４年次に保育所実習Ⅱ、施設実習Ⅱと毎学年実習が行われる。もちろんそれぞれに事前に実習指導が行われるわけであるが、実際学外に出て活動を行うのは、この地域社会参加活動が最初である。

実習であれば、まず実習先に「事前打ち合わせ」に行く。その際、実習先に電話をし、事前打ち合わせのアポイントをとる。事前打ち合わせでは、自己紹介並びに実習の目的等を伝える。同時に実習先の紹介を受ける。実習になれば、積極的に児童・利用者等とコミュニケーションをとらなければならない。一日が終われば実習日誌を書く。実習終了後には実習のまとめを書く。報告会で報告をする。

地域社会参加活動は、上記の実習とよく似たプロセスで活動を行う。まさしく実習の前段階・準備段階である。ただし、いくつかの相違点も見られる。実習は、資格取得という目的のために実施される。地域社会参加活動は授業単位取得のために活動をする。実習先には、指導者がいる。地域社会参加活動には、明確な指導者はいないときもあるなどである。決定的に違うのは、活動

先を自分で選んで決めることであろう。そして「いつ・どこで・誰と・何を行うか」を自分と活動先との相談で決めていく。そうした点を比較する上で、これまで「小・中・高校で行ってきたボランティア活動」と「地域社会参加活動」、「実習」を学生からの視点で活動に伴う一連の項目で比較すると、以下のようになる。

【表５】＜活動比較（学生） ＞

		小・中・高のボランティア	地域社会参加活動	実　習
目的		教育・学校行事等	単位取得	資格取得
活動先の指導者		いる or いない	いる or いない	いる
期待される成果		福祉教育等	自己覚知・進路選択	専門性、進路選択
事前	探す	しない	する	（希望・依頼）
	アポイント	しない	する	する
	手続き	しない	する	する
実施内容等	期間	既定（活動先・学校）	選択可、相談	既定（実習先・大学）
	時間	既定（活動先・学校）	選択可、相談	既定（実習先・大学）
	場所	既定（活動先・学校）	選択可、相談	既定（実習先・大学）
	誰と	既定（活動先・学校）	選択可、相談	既定（実習先・大学）
	内容	既定（活動先・学校）	既定、選択可、相談	既定（実習先・大学）
事後	レポート（日誌等）	する or しない	する	する
	ふりかえり	する or しない	する	する

４．地域社会参加活動からボランティア活動へ

新崎は、ボランティア活動の基本的性格として、①「自発性・主体性」②「公共性・福祉性・連帯性」③「無償性・非営利性」④「自己成長性」⑤「継続性」の５つを上げている。①「自発性・主体性」は、さまざまな社会的課題に対して、自分自身の意志で積極的に関わっていくこと、②公共性・福祉性・連帯性」は、個人的な利益や楽しみのための活動ではなく、共に生きる豊かな社会の創造を目指すこと、③「無償性・非営利性」は、金儲けの手段でないこと。金銭面でのみかえりを期待しないこと、④「自己成長性」は、ボランティア自身も成長すること、⑤「継続性」は、継続することによって相互の信頼関係が深まること、としている。[2)]

この地域社会参加活動では、「ボランティア活動」について、演習で話し合う機会を持ったが、自分たちの活動を「ボランティア活動」とは呼ばずに、「地域活動」と呼んできた。それは、ボランティア活動の基本的性格である①の「自発性・主体性」に疑問を持ったからである。授業で強制的にさせられる活動をボランティア活動と呼んでいいのかという問いは、2009 年度の地域社会参加活動を総括した「地域社会参加活動の意義と課題」（富山国際大学子ども育成学部紀要第１巻 2010）から読み取ることができる。「演習で「あなたにとってボランティアの意義は何ですか？」というテーマについて話し合った。その後、教員は、ボランティアという言葉を使わなくなった。それは、多くの学生がボランティアという言葉から福祉的なイメージを連想していたからである。そのことにより活動範囲が狭められる。「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」ことを目的と

するのであれば、幅広い分野から活動先を選んでほしいという願いが教員の側にあった。そこで、「ボランティア」という言葉ではなく、「地域活動」という言葉を使うようにした（しかし、学生は最後までボランティア活動をしたと意識しているところが興味深い)。そのことにより、活動の範囲・選択肢が拡大された」3)とし、また「いよいよ問題は、学生たちが主体的に活動できるかである。ここが最大の課題であった。ボランティアのイメージから「させられている」「強制されて」と感じているのであれば、およそ主体的に活動が行われるとは言い難い」4)としている。

学生たちが小学・中学・高校で行ってきたボランティア活動のイメージを持ったまま活動をしている限り、この「させられている」「強制されて」という認識は拭い去られない。しかし、学生たちは、最終活動報告書で「ボランティア」という言葉を多く使っている。今年度の最終活動報告書に、以下の記載がある。

私は地域社会参加活動に参加して、ボランティアの私の中での認識を変えることができた。私にとってのボランティアは、「人に言われて」「強制的に」行うものだった。しかし、授業を受けたり実際にボランティア活動に参加したりするうちに「自主的に」「積極的に」行うものだと感じることができた。ボランティア活動とは、「誰もが人間らしく豊かに暮らしていける社会を目指し、身近なところでできることを、自ら進んで活動すること」である。これはただ知識として知っていたに過ぎない。実際に活動することで本当の意味でボランティア活動とは何かを知ることができたように思う。

学生たちが行ってきたのは、「地域活動」であった。しかし、活動の内容を見ると、確かにそれは十分「ボランティア活動」と言えるものであり、先に述べたボランティアの基本的性格に照らし合わせても、①から④までその条件を満たし、授業を離れてもなお行っている活動があるとすれば、⑤を満たす。それはまさしく「ボランティア活動」として捉えていいのではないかと考えられる。

学生たちは、活動前に「あなたにとってボランティアの意義は何ですか？」という問いかけに自分自身でレポートをまとめ、学生同士で話し合ったことから、それぞれにこれまでのボランティアに対するイメージとは異なるボランティア観を持ちながら活動に臨んだことになる。そして、自分の活動を「地域活動」としながらも、はたして自分の活動は「ボランティア活動」なのだろうかという問いを発しながら活動をしている。

最終活動報告書の「活動前の自分」で使われている「ボランティア」と「活動後の自分」で使われている「ボランティア」とは、明らかに意味が異なっている。そして活動前の自分と活動後の自分、そして活動自体をふりかえり、自分の行動を客観的に見ることができることは、ある意味では自分で自分をコントロールすることにつながる。つまり「自律」しようとしているのである。このように見てくると、演習や一連の活動の手順を踏んでいくプロセスを経ることによって、結果として「ボランティア活動」をしていることになっていると言える。

子ども育成学部では、毎年度末、「活動報告集」5)を刊行しているが、学生たちは実習の際の個人票や就職活動の履歴書のボランティア活動の欄に「活動報告集」を参考に地域社会参加活動の活動を記載している。やはり、学生たちにとって、地域社会参加活動の活動はボランティア活動

なのである。

V まとめ

地域社会参加活動の４年間を授業の概要、地域活動の手順や活動状況確認システム及び評価システム、地域社会参加活動の実際・成果を通してふりかえった。

例年、最後の授業に、任意のグループに分かれ、地域社会参加活動を漢字一文字で著すことをしている。以下にそれを紹介する。

＜2009 年度＞　変、頼、一、実、杞憂、感、辛→幸、育、揺→驚、喜怒哀楽

＜2010 年度＞　広、働、新、刺、温、為、笑、変、験（しるし）

＜2011 年度＞　優、初、人、成、輪、学、礎、喜、愛、繋、貴、改

＜2012 年度＞　連、疲、密、醒、気、素、多、学、繋、芽、山、命

重複する漢字もあるが、見事に自分たちの活動の意味を顕している。最後に登場した「命」は、東日本大震災の被災地にボランティア活動に行った学生たちの声であろう。今年度の学生たちは「多くの人たちの連なりに、恰も山に登るがごとく疲れることもあるが、親密な関係の中に自らの素（す）と向き合い覚醒した気は、大切な命の芽を育みながら多様な学びへと繋がる」というメッセージを残した。

あらためて地域社会参加活動をふりかえると、「ボランティア活動」という名称を避けて「地域活動」という名称で活動をしてきたにもかかわらず、結果として「ボランティア活動」の基本的性格の要件を満たしている活動を実際にしていることが明らかになった。つまり、これまで「させられている」というボランティアの観念を払拭し、あらたに「地域活動」に取り組むことで、自分の目的（単位取得）のためではあるが、活動の手順に従い、自分で選び・決定し、活動した。そして、活動後、自分の行動をふりかえり、その活動の意味を考えたとき、自分以外の他者やある事態のために行動を起こしたそのことが、本来の自分のための目的以上に大きな意味があるという認識を持ったということであろうか。言い換えるならば、「人のためにと思い行動した。しかし、それは実は自分のためになっていたことに気づく。そして、その上でもう一度自分以外の人のために行動を起こした時、これまでとは異なる新たな意味を見出す」ことになる。「今、ここで」自分しか感じることのできないかけがえのない経験をするのである。そこに「地域社会参加活動」の意味がある。

そうであるならば、「地域社会参加活動」とは、「地域という『実践の学びの世界』に一歩を踏み出すことによって、①自分自身と向き合い将来の自分の進路を考える機会として、また②実習に向けての準備段階を経験する機会として、そして③あらためて本来の『ボランティア活動』に向かうことのできる機会」として捉えることができる。それは、自分以外の他者のために何かをする経験を通して、人と関わる専門職としての基盤を形成する機会となると言えるのではないか。

大学１年次に、勇気をもって地域に一歩を踏み出した学生たちは、まもなく大学４年間を終え、今まさに「実践の学びの世界」に足を踏み入れようとしている。実践の場に身を置いてもなお人と関わることに喜びを感じながら、学ぶ姿勢を忘れずに歩み続けることを願ってやまない。

引用・参考文献

1) 室林孝嗣・本江理子・村上満「地域社会参加活動の意義と課題」富山国際大学子ども育成学部紀要、第１巻、2010　p140
2) 岡本栄一、「ボランティアのすすめ」ミネルヴァ書房、2005　p24-26
3) 前掲 1)　p139
4) 前掲 1)　p140
5) 富山国際大学子ども育成学部、地域社会参加活動「活動報告集」(2009、2010、2011、2012)

地域社会参加活動についてのアンケート

2013. 1. 8

このアンケートは、来年度の授業に反映させるために行うものです。(該当するものに○をつけてください)

学籍番号　　氏名

【1】活動先を探し始めたのはいつ頃ですか
a 5月　b 6月　c 7月　d 8月　e 9月
f 10月　g 11月　h 12月

【2】活動先は、誰とどのように決めましたか
(1)誰と(複数回答可)
a 自分で　b 友だち　c 家族　d 知人　e 先生(学校)
f その他(　　)

(2)どのように(複数回答可)
a 掲示板　b インターネット　c 友だち　d 家族・知人の紹介　e 新聞・テレビ
f その他(　　)

【3】活動時期はいつですか(複数回答可)
a 5月　b 6月　c 7月　d 8月　e 9月
f 10月　g 11月　h 12月

【4】活動先(箇所数)は何カ所ですか
a 1ヶ所　b 2ヶ所　c 3ヶ所　d 4ヶ所　e 5ヶ所以上

【5】どこで活動をしましたか(複数回答可)
a 公民館　b 地区センター　c 児童館　d 地域行事会場　e 保育園
f 幼稚園　g 小学校　h 中学校　i 高校　j 専門学校
k 特別支援学校　l 障がい児施設　m 障がい者施設　n 高齢者施設　o 富山型デイサービス
p 病院　q 公共施設(キャンプ等)　r スポーツ施設(屋内、屋外)　s イベント会場　t 研修会場
u その他(　　)

【6】活動内容は何ですか(複数回答可)
a 学童保育　b 地域児童活動　c 地域行事　d 保育補助　e 部活(指導・補助)
f 福祉作業補助　g 利用者の話し相手　h 介助　i スポーツ活動　j スポーツ大会
k 児童キャンプ　l 障がい児キャンプ　m スタッフ　n 研修会(準備・補助)　o 募金活動
p その他(　　)

【7】活動時間(合計)は何時間ですか
a 20時間　b 20～30時間　c 30～40時間　d 40時間以上

【8】活動は誰としましたか(複数回答可)
a 自分で　b 友だち　c 家族　d 知人　e その他(　　)

【9】活動前・活動後の心境についておたずねします。
(1)活動前の心境
a とても楽しみだった　b 楽しみだった　c どちらでもない　d 嫌だった　e とても嫌だった

(2)活動後の心境
a とても楽しかった　b 楽しかった　c どちらでもない　d 嫌だった　e とても嫌だった

【10】地域社会参加活動をしてどうでしたか
a 意味があった　b 少し意味があった　c どちらでもない　d 意味がなかった　e 全く意味がなかった

【11】活動前と活動後の自分に何か変化がありましたか。(複数回答可)
a 価値観　b 人生観　c 職業観　d 子ども観　e 障がい者観
f ボランティア観　g 地域の捉え方　h その他(　　)

【12】あなたにとって地域社会参加活動は、どんな意味がありましたか(複数回答可)
a 将来の進路選択　b 地域との関わり　c 人生経験　d 人とのつながり　e 自分自身のため
f 充実感　g 達成感　h 気づき
i その他